

## サッカー代表チームの検証 ・三十年経っても追いつけないか

何故か、今回のW杯ドイツ大会は前回の日本大会や前々回のフランス大会ほど興奮することがなかった。一喜一憂するという意味では、日本大会やアジア選手権の方がエキサイティングだった。前回はまだ、日本はW杯の新参者で、すべてのことが新鮮で興味深かった。世界の中で日本のサッカーはどれほどの位置を占めるのだろうかという好奇心があった。ところが、今回は怖い物知らずの状態から、リーグ戦突破の具体的計算を考へることが必要になった。とにかく一勝したいという前二回の状況から、一勝二分、最低でも一勝一敗一分けで決勝トーナメント進出という計算が必要になった。戦いが現実的になった分、淡い期待は背後に追いやられた。

日本の一次リーグ突破は五分五分だと考えていた。欧州予選を無敗で切り抜けてきたクロアチアを破るのは難しいが、経験の浅いオーストラリアには何とか勝利できるのではないかと。一勝一分けでフランス戦を迎えれば、可能性があると考えていた人は多いだろう。しかし、現実には甘くなかった。九回表に失策から同点にされ、さらに適時打二本で止めを打たれたオーストラリア戦で、今回の日本のW杯は終わった。日本の力がずば抜けている訳ではないから、初戦で4失点も食らいながら決勝トーナメントに出場したウクライナのように、致命的な敗戦を挽回できないことは明白だった。せめて意地を見せて欲しいと願ったフランス戦も完敗に終わった。

今回のW杯で日本が学んだことは何だろうか。日本のサッカーが世界のトップに肩を並べるには何が必要なのだろうか。

### フランス大会と日本大会の教訓

フランス大会ではジャマイカ戦を除き、日本が得点する予感はまったくなかった。確かに、アルゼンチン戦でもクロアチア戦でも予想外に日本のパスワークが決まり、「なかなかやるじゃない」と思った人は多いが、点が取れる気配はまったくなかった。当時、ハンガリーの友人たちは、「点を取らないと勝てないんだよ」と論じてくれたのを覚えている。いくらパスを通すサッカーをやっても、フィニッシュまで持っていかなければ何にもならない。ただの「玉転がし」では、

試合には勝てない。それがフランス大会の結論だった。フランス大会は参加したことに意義があった。日本が得た教訓は、「得点を上げること。それがW杯一次リーグ突破の最低要件」。しかし、新たに代表監督に選任されたのは、DF出身のトルシエ。トルシエは守備に偏った練習を繰り返していた。実践的な練習をしないトルシエの指導法を批判していた人は多い。もっとも、FWには天性の突破力が必要だから、教えてやるようなものではないのかもしれない。

日本大会第一戦のベルギー戦を良く覚えていて、前

の手に着かない。ボールのパウンドが変わって、コースが変わりゴールする。当たり損ねのボールが、キーパーの予測と逆方向に向かい、ゴールに入る。どれもこれも、ボールゲームの意外性だが、これで勝負が決まることもある。だからボールゲームが面白いとも言える。中村のクロスは日本のFWもオーストラリアのゴールキーパーも、全員が目測を誤って生まれたゴール。駒野への明々白々のペナルティが取られていれば、結果も違っていた。実力を超えた運も、勝利の鍵を握っている。

### グローバル化の中のW杯

ブラジル戦を終わって、「日本は三十年かかって世界ノトップに追いつけない」と言えるだろうか。野球の場合は、もう実力に大差ない時代になっている。もっとも、世界の各地の普及度合いはまだ低いから、大リーグに選手を送り出していない地域が世界のレベルに達するまで、かなりの時間が必要なことは確かだ。

他方、サッカーはどうか。明らかに、野球より、はるかにグローバル化が進んでいて、世界のあらゆる地域の選手がヨーロッパに属している。オーストラリアですら、欧州のクラブに属している選手の数が日本より多いのだ。野球のW杯でアメリカが勝てなかったように、いやそれ以上に、各国のサッカーのレベルは均等化しつつあり、絶対的な本命がいなくなつた。驚いたのは、W杯の新参者であるオーストラリアが、直前のオランダ戦で対等以上の戦いをしていただけでなく、決勝トーナメント一回戦でもイタリアと対等に戦っていたことだ。オーストラリアに世界で知られた選手はいない。日本もドイツとのテストマッチで予想を覆す戦いをして、ドイツを慌てさせた。各国の

チーム力は紙一重の時代になっている。だから、選手やチームのコンディションが重要だ。双方のコンディションの違いで、勝負が簡単に逆転する時代になった。

個人競技でも同じだが、団体競技でもチームの状態は日々変化する。対戦相手によって、相性も違ってくる。ブラジルはオーストラリアやクロアチアに苦戦していたが、いくら能力の高い人材が多数いても、チームの歯車が合うまで時間がかかるし、ブラジルのような技術をベースにしたサッカーは、体力勝負でくるサッカーを苦手とする。体の大きい選手が、果敢にフィジカル・コンタクトに来ると、技術だけでは戦いきれない。ラグビーのような体格のオーストラリア選手が疲れを知らずに突進してくると、世界の強豪といえども、簡単に勝てないのだ。他方、日本のように綺麗なサッカーをするチームにたいしては、ブラジルはやり易い。技術だけの勝負になれば、個人の能力差がもろに出てしまうからだ。だから、日本がブラジルに大敗したから、世界の水準からかなり水を空けられているとも言えない。逆に、体力差のあるクロアチアやオーストラリアと互角に戦ったことをもっと評価すべきかも知れない。

W杯の戦いはすべて一発勝負である。各種リーグ戦やカップ戦と違い、リターンマッチがない。だから、勝負所のミスが致命的になるし、何度もあるはずのない決定的なチャンスを外せば勝てない。当たり前のことだが、そのことを再認識させてくれるのが、W杯だと言える。

### オスイムに期待するもの

野球の監督で言えば、トルシエは野村、ズイーコは長嶋ということになるだろうか。守りとデータの野球を信条とする野村と個人の能力や直感に依存する長嶋

半はまるでフランス大会の続きのようなパスワーク中心のサッカーだった。「ああ、これじゃフランス大会と同じだ」と思ったものだ。点がとれる予感はまったくなかった。ハンガリーのTV解説者も、こんなサッカーをやっていたのでは日本は勝てないと言いつついた。ところが、後半にゲームが急変した。1点先行されて、これでフランス大会とまったく同じ結果になると思った矢先に、鈴木隆行が相手のミスしたボールを押し込んだ。これで日本のサッカーの何が吹っ切れた。鈴木の一押しがなければ、稲本の追加点もなかっただろう。その意味でも、鈴木がゲットは歴史的な得点だった。どんな形でも良い、点を取ることの重要性を覚えてくれたゴールだった。

さらに言えば、野球の場合と同様に、チームに勢いを付けるのはラッキーボーイの存在だ。日本大会のラッキーボーイは稲本だった。怖い者知らずの若者が大化けすると、チームに活気が出る。それには若い力が必要なのだ。しかし、今回のドイツ大会には若い爆発力が欠けていた。

それから、トルシエが教えてくれた最大のポイントは、ディフェンスの再認識である。あらゆるスポーツ競技でディフェンスは決定的な位置を占めている。野球では投手が良ければ簡単に打てない。バレーボールでも、レシーブ力が物を言う。1点差でも、ディフェンス力があれば勝てる。とりわけ、大試合になればなるほど、守備力が決定的な意味を持つ。力がそれほど変わらない相手から何点も取れるわけがないから、1点取つたらしっかりと逃げ切れる守備力が大切になる。

もう一つ言えば、「運」を見方に付けることができるかどうかだ。敵味方を問わず、ボールが選手に当たって方向が変わり、ゴールに吸い込まれる。緩いボールが選手の間を転がって、タイミングがずれて、キーパー

は、まさに両極にある。この比較でいくと、新監督のオスイムはさながら巨人のV9を支えた知将牧野茂か。

ゲームは選手がやるものだから、監督の手の届かないところに勝負がある。しかし、ヒディングが率いるチームを見ると、やはり監督の力量を見直さない訳にはいかない。欧州の二部リーグ中心に活躍している寄せ集めの選手を率いて、決勝トーナメントに進んだのは立派というしかない。団体ゲームでは選手を操る能力が力を発揮する。

日本は前2回の大会に比べて、はるかに選手層が厚くなった。控えの選手でチームを作っても、同じレベルのサッカーができる。日本のサッカーが進化していることは間違いない。他方、体の大きいオーストラリア選手より先に、日本選手のスタミナが切れていたのはどうしてだろうか。体の小さい者が先に息切れして勝てる訳がない。決勝トーナメントに勝ち上がったチームの戦闘意欲は、皆、非常に高かった。最後まで、戦う激しさが満ちていたが、日本の選手は淡泊すぎるという印象が強い。多分、中田が日本選手に感じている不満はこういうことだろう。「チームの和」を問題にする前に、個々の選手の戦闘意欲を問題にすべきだろう。

それから、フィジカルな強さ。中村の技術は高いが、バラック、ジェラード、ズイダン、フィーゴなどの世界一流のMFに比べて体の線が細い。実際、中村選手にはシーズン中でも病気や怪我が多い。本番前のドイツ戦でも、高原が膝、柳沢がハムストリングを痛め、肝心の本大会への調整が遅れた。体格の差を補う体の強さがなければ、世界のトップと競うことはできない。世界標準の体力と走力をもたなければ、世界で戦う資格はないだろう。オスイムには選手の力を見極めるだけでなく、フィジカル・トレーニングの強化を期待したい。